
三つのオレンジの恋

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三つのオレンジの恋

【Nコード】

N6442N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ものを言わなくなってしまう王子。その王子を巡って争う魔法使いと魔女。この騒動の最後にあるのは。プロコフィエフのオペラを小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

三つのオレンジの恋

第一幕 沈んだ王子

「いや、あれだよ」

「違つて」

「そうじゃないんだ」

舞台の上で何人かが議論をしていた。

やたらと悲しい顔をした人間もいれば笑っている顔の人間もいる。着飾った男もいれば呆けた顔の人間もいる。どれも老若男女揃つていて誰が誰なのかもわからない程だ。

その彼等が銘々口を開いて言い合っている。議論の内容は。

「この話はどうなるかはだな」

「悲劇にすべきだ」

悲しい顔の連中はこう主張するのだった。

「絶対にそうするべきだ」

「いや、喜劇だ」

笑っている顔の連中がそれに反論する。

「笑えるものでないと」

「詩が一番ではないのか？」

着飾った者達の主張も出て来た。

「叙情というものが欲しいのだが」

「いやいや。そんなものはいらぬ」

呆けた連中まで言い出した。

「やはり馬鹿げた話にしてな」

「いや、やはり悲劇だ」

「喜劇でないと駄目だよ」

「詩人こそが素晴らしい」

「芝居は面白くなって何が芝居なんだ？」

最早混沌としていた。だがそれでも彼等は言い合い続ける。

「悲劇だ」

「喜劇だ」

「詩だ」

「馬鹿げたものにしてだ」

そうした言い争いは何時果てることなく続こうとしていた。しかしこうで。

「ああ、もうそれ位にして」

「止めましようね」

「むっ、あんた達は」

「ピエロじゃないか」

今度出て来たのはピエロ達だった。彼等が出て来てそのうえで一同に告げるのだった。

そうしてそのうえで。そのピエロ達が言つのであった。

「では皆さん」

「今回の舞台はです」

「今回は何をするんだ？」

「それがわからないのだが」

他の者達はピエロ達の後ろから問うた。

「一体何を」

「それで作品は」

「三つのオレンジの恋」

「それだよ」

ピエロ達はその作品が何かも話した。

「それを今上演するから」

「楽しみに待っていてくれ」

「いいな」

「わかった。それじゃあ」

「楽しみにさせてもらおうかな」

「いやいや」

ピエロ達は去ろうとする彼等呼び止めるのだった。そうしてそのうえでさらに告げる。

「あんた達にも仕事はあるんだよ」

「当然わし等も」

「まさかその三つのオレンジの恋に」

「我々も出るのか」

「如何にも」

「その通りだよ」

ピエロ達は得意げに笑いながら彼等に話す。話しながらひょろきんな動作をしてみせるのが如何にもピエロらしい行動だった。

「さあ。だから」

「早く用意しよう」

「早速な」

こつ口々に話していくのだった。

「もうすぐ舞台もはじまるし」

「それじゃあ行くか」

「まあ仕事ならな」

「やるか」

こつ彼等の言葉に頷いてそのうえで舞台を後にする。そうして今舞台がはじまった。

その国が何処にあるのか誰も知らない。何時何処にこの国があったのかはわからない。しかしその国の王宮は実に見事なものだった。みらびやかな装飾で飾られた赤い宮殿だった。丸いアーチ型の屋根に所々に黄金が見える。高い塔が幾つもあり重厚な趣である。

第一幕その二

その中もまた見事なものだった。巨大な暖炉に堆く積まれ飾られた黄金の装飾とクロテンの毛皮、それとウォツカに脂の匂いが満ちている。

音楽も聴こえる。賑やかでかつ派手な音楽だ。大広間もまた同じであり煉瓦の上に紅の絨毯が敷かれている。その中で王は玉座から隣にいる王子を見ていた。

王は濃い黒い髭を生やしクロテンの毛皮のマントに分厚い服を幾重にも着ている。王冠は黄金で出来ておりそこにサファイアやルビーが飾られている。その隣に座す王子も見事な分厚い服を着ている。その顔立ちは柔和で白い。目は青く神は黄金である。小柄で細い面持ちである。その王子を見ながら浮かない顔をしている王だった。

「駄目か」

「はい、どうやら」

「駄目なようです」

そこに頭の禿げた赤い髭と鼻の男と緑と赤の服を着た道化師が出て来て答える。道化師は白く化粧をして笑顔になっているが実際の表情は浮かないものだった。

「王子様はやはり」

「何とも」

「困ったことだ」

王は詩人達の歌を聴きながら浮かない顔をしていた。

「我が御霊は神の御前にあり」

「今永遠の喜びを確かめる」

「この歌も素晴らしいものだが」

王は詩人達の歌を聴きながら述べた。

「しかしそれにも」

「はい、全くです」

「私が何もしてもです」

今度は道化師が言ってきた。

「何もできません。それに」

「それに。どうしたのだトウルフルディーノ」

禿げた男がその道化師の名を呼んで問うた。

「何かあるのか」

「はい、パンタローネ様」

道化師もまた彼の名を呼んでそのうえで応えた。

「私の弟子達が何をしてもです」

「ほら王子様」

「如何でしょうか」

実際に今度はピエロ達が王子の前でおどけた踊りを見せる。呆けた男達もそれと共にあれやこれやと笑ったり騒いだりしているがだつた。

「駄目です、この通り」

「そうか。それではだ」

パンタローネは困り果てた顔をしながらもここで自分の手を叩いた。すると今度は喜劇役者と悲劇役者達が出て来た。そのうえで彼等は混ざって芝居をはじめた。

「ああ、私は歌に生き愛に生き」

「すぐにドウルカマールのところに行かないと」

芝居をする。しかし王子は俯いたままであった。

「駄目か、やはり」

「困ったことだ。このままではだ」

王は王子を見続けながら再び言った。

「王子はわしの跡を継げぬ」

「ええ、これでは」

「流石に。何も喋られず動かれないのでは」

パンタローネも道化師もその言葉に頷いた。

「どうしようもありません」

「それでは」

「王位はあれに譲るしかない」

王の顔は急激に曇ってきた。そしてその顔で言うのだった。

「クラリーチエにな」

「クラリーチエ様ですか」

「あの方に」

「嫌な話じゃ」

王はその顔で再び言った。

「全く以ってな」

「はい、クラリーチエ様は何かと評判の宜しくない方ですし」

「こう言っては何ですが」

パンタローネも道化師もよく見れば困惑しきった顔になっていた。

そうしてその顔で話すのだった。

「意地がお悪いですし」

「それに野心も強い方ですので」

「おまけに浪費家で浮気者だ」

王も彼女のことはよく知っているのだった。

「あの者を王にすれば大変なことになる」

「私もそう思います」

「ですから」

「どうすればよいかのう」

王は悩み苦しむ顔で呟いた。

「ここは」

「そうですね。ここは」

王に伝えてパンタローネが言うのだった。

「祭を開きましょう」

「祭をか」

「そうですね。如何でしょうか」

再び王に対して言うのだった。

「それでは」

「祭りか」

祭と聞いて少し考える顔になる王だった。そうしてそのついで話すのであった。

第一幕その三

「面白いかもな」

「では開きますか、祭を」

「やってみる価値はある」

王は言った。

「それで王子が気を取り直すのならな」

「わかりました。では」

「レアンドル」

王はここでもう一人を呼んだ。すぐに黒い服を着た暗い顔の男が出て来た。暗いのは表情だけでなくその目の色も顔の色もであった。

「王よ、御呼びでしょうか」

「そなたに命じることがある」

己の前に来て一礼した彼に対して告げた。

「よいか」

「何なりと」

まずはこう返したレアンドルだった。

「祭の準備をするのだ」

「祭をですか」

「パンタローネとトゥルフアルディーノを助けてな」

「そうだ」

再び彼に対して告げた。

「王子の心を取り戻す為にな」

「王子のですか」

それを聞くと何故かその顔をさらに暗くさせた彼であった。

「御心を」

「そうだ。できるか」

「わかりました」

そのこの上なく暗い顔での言葉だった。

「それでは」

「頼んだぞ。これで心が取り戻せればだ」

王の言葉は実に切実なものだった。

「王子だけではない。この国も救われるのだ」

「はあ」

今一つ以上に浮かない顔のレАндルだった。だが何はともあれ彼等は王子の為に祭を開くことにしたのであった。その俯いたままの王子に対して。

「しかしじゃ」

「どうしたというの？」

その時地下では黒い足まで完全に隠れた黒い服の魔法使いと魔女がそれぞれ向かい合って座っていた。地下は黒い土の世界でありキヤンドルで照らされている。彼等はその中で黒いテーブルを挟んで座りそのうえでカードをしていた。

「ファタ」モルガーナ。御前も強情だな」

「それは私の台詞よ、チエリー」

金色の髪と目の整った顔の魔法使いに対してこれまた整った顔の銀色の髪と目の美女が返していた。

男は若々しく涼しげな顔をしている。しかし何処か騒がしい目の光を放つてもいる。

女は鼻が高く小さな口をしており知的な美貌を持っている。しかし彼女もまたその表情に何処か騒がしいものをたたえていた。

その彼等が今それぞれカードを持ってそのうえで言い合っているのであった。

彼等の周りでは小鬼達が飛び跳ねて踊っている。それが実に騒々しい。

「悲しいのがいい」

「楽しいのがいい」

「いやいや、詩が一番だ」

「馬鹿話を言い合おう」

こんなことを言い合いながら騒いでいるのだった。そしてチェリ―はその中でクラブのキングを持ちながらファタ・モルガーナに対して話す。一方ファタ・モルガーナはその手にスペードのクイーンを持っている。それぞれ別のカードを手にしているのだった。

「こうして何時までも勝負を諦めないんだからな」

「あんたもね。よく飽きないわね」

「今度は負けんぞ」

強い声でファタ・モルガーナに告げた。

「何があってもな」

「私もよ。あんただけには負けないわ」

「全く」

「強情なんだから」

こんな話をしながら延々とカード遊びを続ける。二人は今も動く気配はなく小鬼達にも全く目を向けることはなかった。ただカードだけをしていた。

そして王宮の大広間では。今は王も王子もいない。そのかわりにレアンドルが金髪を長く伸ばしており目つきの悪い高慢そうでかつ如何にも意地の悪そうな赤いドレスの女と共にいた。そしてそのうえで彼女の前で小さくなつてその話を聞いているのであった。

「情けないことね」

「すみません」

「このままではラチが明かないわ」

女は右手に持っている黒い羽根の扇を振りながら述べた。

第一幕その四

「鬱にさせるだけではね」

「ではクラリーチエ様」

レアンドルはその言葉を聞いて彼女の名を呼んだ。二人しかいない王宮は静まり返っている。玉座と王子の座の向こうには果てしない闇が広がっている。

「それでは一体何を」

「色々あるわ」

ここでクラリーチエは酷薄な笑みを浮かべたのであった。

「色々よね」

「色々ですか」

「思いつかないの？例えば」

その酷薄な笑みと共にさらに話す。

「阿片や」

「阿片……」

「それが銃弾か」

物騒なものを次々に出すのだった。

「それで王子を完全に呆けさせてしまつか亡き者になるかよ」

「あの、幾ら何でもそれは」

レアンドルはクラリーチエのともでもない言葉を受けてその表情を曇らせた。暗い顔ではなく曇らせた顔でそのうえで言うのだった。

「酷過ぎるのでは」

「酷い？何処がかしら」

彼にそう言われても平然としているクラリーチエだった。

「呆けさせても始末してもどうということはないじゃない」

「今のままで充分ではないでしょうか」

レアンドルの顔は困惑しきったものであった。

「流石に。御心が戻っていないのですから」

「戻ったらそれで何もかもが終わりなのよ」

しかしクラリーチエはまだ言うのだった。

「そう、何もかもね」

「しかし祭を開いてもです」

レアンドルがここで出した名前は。

「ファタ」モルガーナの魔法で王子は何があっても

「念には念を入れるべきよ」

クラリーチエの言葉は変わらない。

「だからよ。ここは」

「王子をですか」

「私がこの国の主になったなら」

今度はこうしたことを言うのだった。

「レアンドル」

「はい」

「貴方はこの国の王よ」

「私ですか」

「私は今一人よ」

独身ということである。見ればそれなりにい歳であるがそれでもだ。

「そして貴方も」

「はい、妻に先立たれてもう随分経ちます」

こう述べるレアンドルだった。

「それはそうですが」

「ならお互い都合がいいわ。私が女王で」

「私が王」

「王になりたいわね」

あらためて彼に問うた。

「それで」

「ええ、まあ」

少し力なく答えるレアンドルだった。

「それはその通りですが」

「なら決まりよ。わかったわね」

「わかりました」

「とりあえず殺しはしなくても」

それは一先置くというのである。

「祭が開かれても」

「王子を笑わせない」

「そうよ。そしてその為には」

クラリーチエの言葉は続く。それと共に彼女の頭の中はかなり激しく仕事を続けていた。

「あの女にここに来てもらっわ」

「ファタ¨モルガーナをですか」

「そうよ。あの女が来れば」

また言うクラリーチエだった。

「もうその魔法で何もできなくなるわ」

「確かに。あの女の魔法では」

「そうよ。私達には地下の世界の魔法使いがいるのよ」

このことにかなり強い後ろ楯を感じているクラリーチエであった。

第一幕その五

「お祭で何か出来るわけではないわ」

「それでは」

「すぐにファタ・モルガーナを呼び出して」

クラリーチェはレアンドルに告げた。

「いいわね」

「はい」

こうして二人は手を打った。その後で祭が開かれた。場所は王宮の中庭であった。雪が降る白い世界の中で王は王子と並んで座っている。そのうえで我が子を心配そうな顔で話しているのであった。

「祭で本当に上手くいくのか？」

「やってみないとわからないかと」

王の横に立つパンタローネがこう答える。庭にはクラリーチェやレアンドルだけでなく多くの大臣た貴族達が揃っていた。そこにはあの悲劇役者に喜劇役者、詩人に呆けた者、ピエロ達も揃っていた。彼等はそれぞれの芝居や歌の打ち合わせに余念がなかった。

「そしてここでは」

「よし、そうしてだ」

「そのうえで皆で」

「盛り上げよう」

「頑張つてな」

こんな話をして打ち合わせをしている。クラリーチェとレアンドルは隣にいる長い銀髪を後ろで束ねたファタ・モルガーナとあれこれと話をしている。

「それだけけれど」

「頼んだぞ」

「任せておくことよ」

ファタ・モルガーナは自信に満ちた顔で二人に告げていた。

「私が来たからにはね」

「大丈夫なのね」

「何があるうとも」

「私を誰だと思っっているのかしら」

「こんなことも言うのだった。」

「私は地下の魔女よ」

「ええ」

「それはよくわかってるつもりだ」

「私の魔術には誰もあがらうことはできはしない」

その自信はここでも健在だった。

「絶対にね」

「それじゃあ今も」

「頼んだぞ」

こつ言葉を交えさせてそのうえで祭が開かれるのを待っていた。

やがて道化師が庭の真ん中に出て来てそのうえで一同に告げるのであった。

「さあさあ皆々様」

「おお、道化師だ」

「いよいよはじまるな」

貴族達は彼の姿を認めてそれぞれ言った。

「さて、それじゃあ」

「何がはじまるかな」

「まずはこれを御覧下さい」

「やあやあどうもどうぞ」

「お邪魔します」

まず出て来たのはピエロ達だった。それぞれ過渡やかに動き回りながらおどけてみせている。

「こつしてほいっ」

「どうぞでしょうか」

逆立ちをしてそこから飛び跳ねたり奇妙なダンスを踊ったり。そ

れが最初に一同の興味を引いた。

「これはかなり」

「見事な」

「今我々は明るく働き」

「明日の為に笑いましょう」

今度は詩人達が出て来て歌う。呆けた者達は彼等の演奏に合わせて芸をしてみせる。

「ほいっと」

「はいっ」

腹を見せるとそこには顔が描かれている。

それを動かしてみせる。すると一同大笑いになった。

「おお、これは面白い」

「蛇も操ってみせているし」

見れば蛇を出してそれを詩人に向ける。すると詩人達は演奏は続けているがびっくりした顔になって逃げ惑う芝居をしたのであった。

第一幕その六

「蛇だ蛇だ！」

「逃げる！」

こうした話をして逃げ惑ってみせる。わざと慌てて。そこに悲劇役者達が出て来て。わざと嘆いてみせる。

「雪に蛇が出て来るとは」

「これ以上の嘆きがあるうか」

「ああ、神よ」

そのままの彼等の普段の演技だが実に場違いなものであった。

「これではどうしたものか」

「最早何もないではないか」

この場違いさも笑いの元だった。最後には喜劇役者達が登場して面白おかしく芝居を見せる。誰もが一連の見世物に大笑いだった。しかし王子だけは。

「駄目か」

「はい」

「お祭でも」

パンタローネと道化師も俯いたままの王子を見ながら王に答える。

「どうしても」

「駄目なようです」

「困ったのう」

王はいよいよ手がなくなっただと思いだしていた。

「このままでは本当に」

「クラリーチェ様がこの国の王になります」

「そうです。あの方が」

道化師も困り果てた顔になっていた。そうして無意識のうちにそのクラリーチェのいる方に顔をやる。そしてそこで彼女を見つけたのであった。

「むっ!？」

「どうしたのだ？」

「いえ、あの女ですが」

パンタローネの言葉に伝えてそこにいるファタ〓モルガーナを指差したのであった。

「あの銀色の髪と目の女は」

「むっ!？まさか」

「ええ、そのまさかですよ」

ここでまたパンタローネの言葉に応えるのだった。

「ファタ〓モルガーナです」

「あの女が何故ここに!？」

「クラリーチエ様のお側にいますが」

「では悪巧みをしているのか」

「その可能性は高いかと」

ファタ〓モルガーナの名前はこの国にも届いている。非常に底意地の悪い魔女としてだ。

「ですから」

「追い払うに限るな」

「また何をしてくるかわかりません」

不吉なものを感じながら述べる道化師だった。

「ですから」

「追い払おう」

「はい」

こうして道化師はファタ〓モルガーナの方にそつと近付いた。そうして化粧の下に剣呑な表情を隠してそのうえで彼女に告げるのだった。

「おい」

「何よ」

「何よではないっ」

怒った声でファタ〓モルガーナに告げる。

「ファタ」モルガーナだな」

「人違いよ」

「ではその髪は何だ？」

まずは髪の毛を指摘するのだった。その銀色の髪の毛を。

「それに目の色も」

「髪や目がどうしたっていうのよ」

「どちらも銀色ではないか」

道化師はそのまま指摘してみせた。

「それこそが何よりの証拠だ」

「私がそのファタ」モルガーナだっていう？」

「その通りだ。何をしに来た」

今にも彼女に殴りかからんばかりの剣幕になっていた。

第一幕その七

「何を企んでいる。ことと次第によつてはだ」

「どうするつていつのよ」

「出て行つてもらつぞ」

一歩ずい、と前に出たの言葉だった。

「いや、本当に出て行つてもらおうか」

「いい度胸ね」

ファタ「モルガーナも負けてはいない。如何にも気の強そうな顔で彼に返してきたのだった。

「私にそんなこと言うなんて」

「出て行かないのか」

「あなたの指図は受けないわ」

彼の顔を見上げて言い返してみせた。

「あんななんかのはね」

「言ったな。では腕づくでもだ」

「できるつていつの？」

いよいよ一触即発となつてきた。どちらも全く引かない。

「言つておくけれどね、喧嘩では子供の頃から負けたことがないの

「よ」

「口喧嘩でか？」

「殴り合いでもよ。男にもね」

「面白い。それはわしもだ」

完全に売り言葉に買い言葉であった。

「ではだ」

「やるのね」

「こつしてやるわつ」

いきなりファタ「モルガーナの左腕を掴んだ。そうして。

「さあ出て行け」

「追い出そうっていうのね、本当に」

「悪巧みをしているに決まっているわっ」

彼は既に彼女のことをよく知っていた。地下にいてそこから悪巧みをして魔法を使う悪い魔女だと。既に有名になっているのである。

「だからだ。出て行けっ」

「はいそうですね。従う奴なんていないわよっ」

ファタモルガーナも負けてはいない。彼のその手を思いきり振り払って返す。

「誰があんたみたいなの不細工なピエロに！」

「誰が不細工だ！」

「あんたよ！」

今度は言い争いは始める二人だった。

「あんた以外に誰がいるのよ！」

「わしは男前で通っている！」

道化師は意地になった声で彼女に言い返した。

「それこそ水も滴るようなな！」

「そのお化粧でわかるものですか！」

「では見てみるか！」

「ええ、見てやるわよ！」

言い争いはさらに激しいものになっていく。

「その不細工な顔をね！」

「おのれ、まだ言うか！」

「何度でも言っつてやるわよ！」

ファタモルガーナは実際に言いながら彼に掴みかかってきた。

「この醜男！」

「この魔女が！」

そして道化師も応戦する。お互いにつねったり引つ掻いたり掴んだり引つ張ったりといったみともない喧嘩に入ってしまった。それは周りにも丸見えだった。皆そうした二人を見て祭をよそに言うのだった。

「何だ？見世物か？」

「芝居の一環か？」

こんなことを言いながら二人を見る。それは王達も同じだった。

「どうしたのじゃ、道化は」

「さて」

王の問いに首を傾げるしかないパンタローネだった。

「何でしょうか」

「見世物じゃろうか」

「そういえばあの女」

パンタローネはその目を細めさせて言った。

「ファタモルガーナに似ていますな」

「そういえばそうじゃな」

「よく化けております」

まさか本人だとは思っても寄らないのだった。

「髪を見事に染めて」

「目はそのままなのかのう」

「魔法で色を変えてみせているのでは？」

二人は能天気にもう考えていた。

第一幕その八

「いや、それにしても本人によく似ています」
「全くじゃ」

二人は本物だとは全く気付いていない。そしてそれは道化師やクラリーチエ達以外の祭に参加し観ている者達も同じであった。

「いや、面白い見世物だ」

「今度の演目はファタ・モルガーナとの喧嘩か」

「それにしても本人にそっくりだな」

見世物だと思っているのだった。

「髪の毛や目の色も」

「顔も似ているよな」

「服までな」

何もかもがそっくりだと感心していた。勿論二人が本気で喧嘩をしているとは思っても寄らない。二人は既に髪の毛は乱れ帽子も服も破れだしている。汗だくにもなっており実に酷い様子であった。

しかしそれでも喧嘩を続けている。クラリーチエ達は何時の間にかファタ・モルガーナと離れていた。そうしてそこから喧嘩を見ながらひそひそと話すのであった。

「私達は無関係よ」

「関係ありませんか」

「そう、あの女はファタ・モルガーナではないわ」

こういうことになって厄介ことから避けようというのがクラリーチエの魂胆であった。

「いいわね、それで」

「はあ。それでしたら」

「ここで見ていればいいから」

何時の間にか祭の端に位置していた。そこから高見の見物に興じることにしたのだった。

それで脚も下着も丸見えになってしまっている。

「おお、脚もいいな」

「全くだ」

「実に艶かしい」

これには悲劇役者であつても呆けた者であつても言葉は同じだった。黒いハイヒールにこれまた黒いストッキングに包まれた脚は確かに見事なものだった。

「それに下着も」

「色気があるな」

「美人だし余計に」

喜劇役者も詩人もそのショーツに目が釘付けになっていた。ストッキングはガーターでありショーツは黒である。肌が白いだけにその黒がかなり目立つ形になってしまっている。

「いやいや、これは面白い余興で」

「サービス満点」

ピエロ達がおどけて踊りながら囃し立てる。

「まさかこんな美女が出て来るとは」

「しかもこんなものを見せてくれるとは」

「全く全く」

貴族達も満足している。そして王子も。

「あはは、何あの女の人」

王子の席から転げるようにして笑いだしたのである。

「パンツまで見せて転んで。喧嘩だけでもおかしかったのに」

「しまった、魔法が」

ファタ・モルガーナはここで王子にかけていた鬱病の魔法が解けてしまったことを悟った。

第一幕その九

「喧嘩に夢中になってそれで」

「奇麗なのに下着まで見せて」

王子は笑い続けている。

「それもあんなこけ方ってないよ」

「王子が笑ったぞ」

「はい」

王もパンタローネも顔を見合わせて言い合う。

「何ということじゃ」

「奇跡です、これは」

「王子様が笑われたぞ」

「しかもあれ程明るく」

他の者達もこれには驚いていた。

「いや、何と素晴らしい」

「全くですな」

皆このことに驚いたうえで喜んだ。二人を除いて。

「どういふことなの!? これは」

「魔法が解けたようです」

レアンドルが驚いているクラリーチェに対して告げていた。

「どうやら」

「あの魔女がパンツを見せたからなの?」

見ればファタ・モルガーナも上体を起こしたまま呆然となっている。相変わらずその見事な脚と下着を露わにさせたままであった。

「そのせいだつていふの!？」

「若しくはあの時の喧嘩に夢中になって」

「何てことなの」

事態を理解したクラリーチェは今度は忌々しげな顔になって呻いた。

「それでこんなことになるなんて」

「どうでしょうか」

レアンドルはおずおずと主に尋ねた。

「この事態は」

「様子を見守るしかないわ」

とりあえずはこう言うクラリーチェであった。

「今はね」

「左様ですか」

「魔法が解けたのは癪だけれど」

「事實は事實として認めるしかないということだ。」

「ファタ」モルガーナだってこのままじゃ終わらないでしょうしね」

「そうですね。それでは」

こうして二人は今は様子を見守ることにした。王子はなおも笑っている。

「しかもまだパンツも脚も見せたままだし」

「えっ……」

王子の今の言葉で自分の状況に気付いたファタ「モルガーナだった。」

「いけない、これじゃあ」

慌てて服を元に戻し隠すべきものを隠す。そうして立ち上がって身なりを整えて。そのうえでまだ笑っている王子をきつと見据えるのだった。

「見たわね」

「見たも何も見せてくれたじゃない」

王子の言う方が正解だった。

「違うの？それは」

「許さないわよ」

しかしこの場合正論は何にもなりはしなかった。かえってファタ「モルガーナを怒らせるだけであった。」

彼女はその身体をワナワナと震わせそのうえで。右手から黒い星

が付いたステッキを出してそれを王子に突き付けて叫んだのだった。

「呪われるがいいわ！」

「呪い！？」

「そうよ、三つのオレンジに恋をしなさい！」

怒りのまま叫んだのであった。

「そうして死ぬ程苦勞して本当に死ぬがいいわ！」

「何っ！？まさか」

「あの女は」

ここで皆やつと気付いたのだった。

「まさか本物の」

「ファタ¨モルガーナなの！？」

「さあ、王子よ」

呪いをかけ終えてもまだ怒っているファタ¨モルガーナはさらに王子に対して告げる。

「そのオレンジを観つける旅の中で野垂れ死になさい！」

こう言うと彼女のいる場所に派手な爆発が起こった。そうしてその中に消え去ったのであった。

「消えた………」

「じゃあやつぱり」

これではつきりとなった。彼女はやはりファタ¨モルガーナだったのである。あの悪名高き。

「本物だったとはのう」

「全くです」

皆そのことに呆然となっている。それは王とパンタローネも同じであった。

第一幕その十

「しかし三つのオレンジとは」

「何なのでしょうか」

「よし、それなら」

だがここで王子が言うのだった。

「見つけ出しに行くよ」

「えっ、王子」

「何と」

「道化よ」

彼は周囲が自分の言葉に顔を向ける中で道化師に顔を向けて告げ
てきた。

「そなたが共になるのだ」

「えっと、私がですか」

「そうだ。目指すは魔女クレオンタの城だ」

「魔女クレオンタの!？」

「あの世界の果てにある」

クレオンタという魔女は世界の果てに住んでいるのである。森に
河に谷に海に荒野に山に砂漠を抜けたその果てに。一人で住んでい
る変わった魔女である。

「まさか。そんなところまで行かれるとは」

「折角御病気が治ったのに」

皆今の王子の言葉に驚く。王はさらに切実に我が子に対して問う
のだった。

「王子よ、それは本気なのか？」

「はい、そうです」

王子の返事は聞き間違えようもないまでにはっきりとしたもので
あった。

「父上、私は行きます」

「魔女の城にか」
「三つのオレンジを手に入れに」
その為だというのである。
「今から行きます」
「しかしじゃ」
王は困惑しながら我が子に言葉を返す。
「そこまで辿り着けるのか」
「御心配には及びません」
「ここでもはつきりと答える王子だった。」
「今の私には勇気も分別もあります」
「それでもじゃ。途中には」
「そして剣もあります」
「こう言つて聞かないのであつた。」
「そして知恵袋も」
「それが私なのですね」
「その通りだ」
満足した顔で道化師を見ながらの言葉であつた。
「そなたもいてくれる。だから大丈夫だ」
「はあ。そうですか」
「ですから父上」
「あらためて父王に言つのであつた。」
「今から行きます」
「何とということじゃ」
怒涛の、かつ衝撃の展開にまずは啞然となっている王だった。
「この様なことになるとは」
「どうしましょうか」
「行かせるしかあるまい」
「パンタローネの言葉にも啞然となつたまま返すだけだった。」
「今はこのう」
「左様ですか」

「では道化師よ」

王子はもう席を立っていた。腰の剣と白いマントが如何にも王子らしい。

「行くぞ」

「今ですか」

「そうだ、今だ」

道化師の問いにこれまたはっきりとした言葉で返す。

「わかったな。それではだ」

「はあ。それじゃあ」

「いざ冒険の旅へ！」

腰の剣を抜きそれを天に高々と掲げての言葉であった。

「三つのオレンジを手に入れる為に！」

呆然とする周りの者をそのままに旅立つ王子であった。後に従う道化師もまだ呆然としていた。

第二幕その一

第二幕 オレンジの中の姫

魔女クレオンタの城を目指す王子一行。その足取りは実に速いものだった。

瞬く間に森も河も谷も越え海も荒野も山もものとはしなかった。途中襲い掛かって来た魔物や野獣、山賊達もその知恵と剣で全て倒し今では最後の難関である砂漠を進んでいるのだった。

砂漠は辺り一面黄色く焼けた砂があるばかりである。空には太陽が憎らしいまでに強い光を放っている。その中を王子は道化師を連れて意気揚々と進んでいた。

「もうすぐ砂漠を越えるな」

「ええ、そうですね」

道化師は前を進む主の言葉に応えた。二人は確かな足取りで砂漠を進んでいる。

「三日歩いていますし」

「思ったより楽な旅だったな」

王子は堂々とした姿勢で前を進みながら言った。

「この旅は」

「楽っていいですか王子が凄過ぎるんですよ」

道化師はこれまでのことを振り返りながら彼に返した。

「だって何が目の前にあっても何が来ても」

「どうしたというのだ？」

「平気な顔で越えてやっつけちゃったじゃないですか」

どの様な困難な場所でも恐ろしい敵が出て来てもであったのだ。

「大海原も越えましたしドラゴンだってやっつけたし」

「その様なことは造作もないことだ」

「ここでも胸を張って言う王子だった。」

「今の私にはな」

「そうなんですか」

「目的があればだ」

王子の言葉は続く。

「どの様な困難も困難とはならない」

「どんなものがでもですか」

「そうだ。だからだ」

王子の足取りはここでも確かなものだった。

「私はオレンジを手に入れるのだ」

「わかりました。しかしですね」

不意に首を捻る道化師であった。

「一つ思うことがあるんですが」

「何だ？それは」

「何でオレンジなんですか？」

彼はそれがどうしてもわからないのだった。

「オレンジが。まああの性悪魔女の呪いのせいなんですけどね」

「さてな。果たして何があるかだな」

「何も無いかも知れませんか」

こんなことも言う道化師だった。

「あいつのことですから。悪意のもんですし」

「それでも私は手に入れる」

呪いをかけられたせいだとわかっているとしても王子の決意は揺るがなかつた。

「三つのオレンジをな」

「わかってますよ。じゃあクレオンタのお城にですね」

「もうすぐだ」

こう話しながら先を目指す。その二人の前に黄金の髪と目の男が姿を現わしたのであった。

二人はその男を見て。すぐに言ったのだった。

「むっ、貴方は」

「魔女チェリーではないですか」

「私のことは知っているのだな」

チェリーは二人が自分を見ても驚かないのを見てまずはこう述べた。

「既に」

「貴方も有名人士ですからね」

道化師が彼に言葉を返した。二人は自分達の前に姿を現わした黄金の髪と目の魔法使いと対しながらそのうえで話すのだった。

「地下の世界にいて人の為になることをする」

「その通りだ」

道化師のその言葉に対して頷くチェリーだった。

「そしてファタ・モルガーナのライバルですね」

「あの女はこの世がはじまった時から共にいるが」

ファタ・モルガーナの名前が出て来ると途端に不機嫌な顔になった。

「好きになれん。むしろ」

「むしろ？」

「大嫌いだ」

お互い嫌い合っているのである。

「全く以ってな」

「ああ、そうですね」

道化師は彼のむっとした顔になったうえで言葉に納得した顔で頷いた。

第二幕その二

「貴方達はそれこそ」

「まさに火と水だ」

それだと自分で言うチエリーだった。

「ずっとな」

「その通りですね。それですが」

道化師は彼の話聞きながら言葉を返した。

「どうしてここに」

「ここにか」

「はい。私達の前に出て来た理由は」

「やはりあの女のことだ」

むっとした顔はそのままであった。

「あの女がこの王子に呪いをかけていたことは前から知っていた」

「そうだったのですか」

「機を見て何とかしようとは思っていた」

王子を見ながらの言葉である。

「しかしその前に肝心の呪いが解けてしまったがな」

「そうすると今度はこの呪いで」

「それでだ」

道化師の話を受けながら述べるチエリーであった。

「魔女クレオンタの城はこれまでの様にはいかん」

「といいますと」

「魔女はあの城に一人で暮らしている」

「まずはこのことを二人に話すのだった。」

「そしてオレンジのある場所はだ」

「台所ですね」

王子がすぐに答えてきた。

「そこですね」

「わかるのか」
「オレンジは食べるものですから」
「だからだと述べる王子だった。」
「食べ物があるのは台所ですから」
「その通りだ。流石にわかつているか」
「はい」
「きつぱりとした声で答える。その声は聡明そのものの声であった。」
「そこだと」
「そうか。なら話は早い」
「チェリーは彼の言葉を聞いて頷き。そのうえでまた言った。」
「そなたにこれを渡そう」
「これは？」
「見ればそれはピンク色のリボンである。それを王子に対して手渡してきたのだった。」
「王子はリボンを受け取った。そうしてそのうえでまた魔術師に対して尋ねた。」
「このリボンは一体？」
「魔女はリボンが大好きなのだ」
「リボンがですか」
「魔女とても女だ」
「至極当然のことを話すチェリーであった。」
「このリボンを見せれば気を取られる」
「ああ、それですね」
「それから」
「王子も道化師もここまで聞いてすぐにわかったのだった。」
「その際にオレンジを手に入れて」
「そうするのですね」
「そうだ。そうすればいい」
「まさにそれだと教える魔術師だった。」
「わかったな」

「はい、それで」

「わかりました」

二人ははつきりとした声で彼の言葉に答えた。

「じゃあそれで」

「やらせてもらいます」

「敵もいれば味方もいる」

チエリーは二人の言葉を受けてからまた述べたのだった。

「そのことはよくわかっているのだぞ」

「わかりました」

王子の返事を聞くとすぐに姿を消す魔術師であった。まるで煙の様に姿を消し後には何一つとして残ってはいないのであった。

第二幕その三

彼が消えてから王子は。道化師に顔を向けて言うのだった。

「これでオレンジは手に入ったな」

「そうですね。ですが王子」

「何だ？」

「若しもあの魔法使いが出て来なかったらどうされてました？」

「その時はそのままだよ」

毅然とした声で答える王子だった。

「僕の力でね」

「オレンジを手に入れておられたんですね」

「そうだよ。そのつもりだったけれど」

「その場合は物凄いことになっていたでしょうね」

道化師はそれを聞いて唸るように言った。

「それこそ。魔女と死闘で」

「それを覚悟していたけれど」

「いえいえ、とんでもありませんよ」

道化師はここでも平然と言う主に対して驚いて告げたのだ
た。

「若しそんなことをすればですね」

「どうしたっていうんだい？」

「竜やグリフォンなんてものじゃないですから、魔女は」

そうしたとてつもなく強い魔獣達より遥かに強いというのである。

「それこそ命が幾つあったってですね」

「じゃあこのリボンを使えば」

「はい、もう大丈夫です」

この幸運に心から喜んでいる道化師である。

「ですから行きましょう」

「うん、いざ最後の難関へ」

こうして二人は砂漠の向こうにあるその城に辿り着くのだった。城はまるで蜃気楼の中にあるかの様だった。砂漠の果てに赤い煉瓦の城が建っていた。

二人は早速城壁に縄をかけそれで城壁をよじ登る。そのうえで中に忍び込み忽ちのうちに台所に入り込んだ。台所はかなり清潔で整然と鍋やフライパンが置かれている。火は今はなく所々に食材が置かれている。そうした台所であった。

「奇麗なものだな」

「そうですね」

二人はその台所を見回しながら話す。

「思っていた以上に」

「これならオレンジは簡単に見つかりますかね」

「そうかも知れないな。果物は」

「ああ、ここですね」

道化師が見つけた。丁度目の前にバナナやら桃やら林檎やらがありその中にオレンジが三個あったのである。みずみずしい実に美味そうなオレンジ達であった。

「このオレンジですね」

「そうか、これなんだね」

「はい。それじゃあ」

道化師達はそのオレンジを手に取った。そしてそのまま台所を去ろうとする。しかしここで赤い髪と目をした奇麗な女が台所にやって来たのだった。

「さて、今日の夕食は」

赤く長い髪は後ろに伸ばしている。それは腰まである。白い顔は顎の先が少し尖っていて全体的に整っている。鼻の形も高めでいい目は丸く大きい。何処かアジア系の面持ちである。

彼女も黒い服を着ている。あのファタ・モルガーナが着ていた服と同じである。その格好で今一人で台所にやって来たのである。

「あの魔女は」

「あれがクレオンタか」

「さてと、昨日は子羊のステーキだったから」

クレオンタはまだ二人に気付かず一人であれこれと考えながら述べていた。

「今夜はお野菜を使ってあっさりしたものにしようかしら。お魚も一緒に」

「早く出るとしよう」

「そうですね」

二人は彼女の姿を認めてそそくさと台所から消えようとした。ところが。

「あっ、あなた達は」

「むっ、しまった」

「見つかったか！」

その通りだった。クレオンタに見つかってしまったのだ。魔女は彼等の姿を認めるとすぐにその手に大きな柄杓を出してきたのであった。

そうしてその柄杓で。二人を殴らんとしてくる。

「私の御馳走を取ろうなんていい度胸ね！許さないわよ！」

「王子、あれを」

「あのリボンをか」

「はい、投げればいいかと」

「よし、それなら！」

王子は道化師の言葉を受けて早速懐からそのピンクのリボンを出して魔女に向かって投げる。魔女はリボンを見るとすぐに柄杓を放り出してそれを手に取ったのだった。

「リボンじゃない、それもピンクの」

リボンを手にとって喜色満面であった。

「これなら丁度いいわ。こうして」

早速そのリボンで髪を括りだす。そしてツインテールにしてみても。

第二幕その四

「こんな感じかしら。今度あの人とのデートはこれで行って」

「よし、今だ」

「ですね」

二人は彼女がリボンに夢中になっていている間に台所を出た。そうしてまた縄を使って城を後にするのだった。

城を出てまた砂漠に入る。ところがここで二人は思わぬ事態に襲われてしまった。

何とその持ち出した三つのオレンジがである。徐々に大きくなってきたのだ。まるで子供が成長するかの様に。

「あの、王子」

「ああ、また大きくなってきたね」

道化師は一つ、王子は二つ持っている。怪力の王子は自分の身体程にまで大きくなったそのオレンジをそれぞれ肩に担いで持っている。

「また一段と」

「何なんでしょうかね、このオレンジ」

道化師はそのオレンジを背中に担ぎながら言う。顔中汗だらけである。

「あからさまにおかしいですけれど」

「わからない。ただ」

「ただ？」

「これを国にまで持って帰らないといけない」

王子は言うのだった。

「それは何としても」

「別に持って帰らなくてもいいんじゃないですか？」

しかし道化師はこう言うのだった。

「別に」

「別にだつて？」

「ええ。何しろ目的は果たしました」

このことを話す道化師だった。

「ですから。もうオレンジは」

「別にいらないうのか」

「一番簡単な方法はですね」

道化師はさらに言葉を続けていく。

「食べることですね」

「食べる」

「そうですね、このオレンジをです」

これが彼の提案だった。

「食べるんですよ。どうでしょうか」

「そうだな。食べればお腹が膨れるし」

「しかも荷物もなくなります」

今はこれが一番大きな目的だった。

「荷物もです。ですから」

「それに喉も渴いたし」

あまりにも重いものを熱砂の中で運んでいけばだった。汗をかいてしまいそうになってしまうのも道理であった。そうならない方がおかしい話である。

「それじゃあ」

「はい、食べましょう」

ここでまた言う道化師だった。

「早速」

「そうだね。では」

二人はその三つのオレンジをそれぞれ砂漠の上に置いた。そうして王子がその腰の剣を抜いて最初のオレンジを斬った。するとだつた。

「えっ!?!」

「何と」

その斬られたオレンジを見てまずは驚きの声をあげる二人であった。そこから出て来たのはオレンジの中身ではなく一人の少女だったのだ。少女は虹色の髪と瞳を持つ実に美しい少女であった。

服は薄い白い服で今にも透けそうである。楚々とした外見でその顔立ちもまるで妖精の様である。奇麗に波がかった細い眉に切れ長の目、口は横に広く唇は薄い。そんな少女だった。

「オレンジの中から女の子が」

「どうということなのでしょう」

「私はニネッタといいます」

「ニネッタ？」

「はい、妖精の国の王女です」

それだと王子に答えるのだった。

「三つの命を持っていますますがその三つ共を魔女クレオンタに封じられて」

「それであのお城にいたんだね」

「はい」

王子の問いに対してこくりと頷いてみせてきた。

第二幕その五

「その通りです」

「またそれは実に」

「面妖な話ですな」

王子だけでなく道化師も言った。

「その様なことがあったとは」

「しかしこれで貴女は助かったのですね」

「はい。ただ」

「ただ？」

「私は……」

ここまで言うのと急に力をなくしその場に倒れこむニネツタだった。そうしてそのまま事切れ彼女も彼女を包んでいたオレンジの皮も消えていく。最初のオレンジはこうして消え去ってしまった。

「消えた」

「これまた実に面妖な」

二人はそのオレンジも王女も消え去ったのを見て言った。

「どういふことなんだろう」

「ええと、確か王女は」

道化師は彼女の言葉を思い出しながら王子に対して話す。

「三つの命を持っていると仰いました」

「そうだったね」

「そしてそれが三つのオレンジに封じられていると」

「じゃあ残る二つにも」

「そうだと思います」

こう答える道化師だった。

「残る二つの中にも」

「よし、じゃあ」

王子は彼の言葉を聞いてすぐに剣で二つ目のオレンジを斬った。

するとそこからも二ネツタが出て来たのだった。最初の時と全く同じ姿であった。

「また御会いしましたね」

「ええ」

王子は彼女の言葉に応えた。

「またですね。本当に」

「それですが」

二人目の彼女はここで言うのだった。

「私に」

「貴女に？」

「命を」

「こう言うのである。」

「命を………下さい」

「命をつて」

「そうすれば私は」

また声が弱くなってきていた。

「貴方と共に………」

「こう言い残してまた倒れ込んだ。そしてまたオレンジと共に消え去ったのである。」

王子と道化師は残る一つのオレンジの前にいた。そうしてそのうえで話すのだった。

「命とは」

「ええ。それが欲しいと仰っていましたが、怪訝な顔で話す。」

「それは一体何なのでしょうかね」

「わからないな。命といえば」

「人間食べないと命はありませんがね」

「ここでこんなことを言う道化師だった。」

「とてもね」

「そうだね。それに水も」

第二幕その六

また二ネツタが出て来た。彼女は言うのだった。

「これが最後の命です」

「わかっています。トゥルファルディーノ」

「はい」

「水筒を」

こう言つて水筒を貰いそれを彼女に差し出す。すると彼女はすぐにその中の水を飲みだした。そうするとだった。

「これでいいです」

「命を手に入られたのですね」

「はい、そうです」

満足している顔と声で王子に答えてきた。

「もうこれで」

「そうだったのですね。水だったのですね」

「ええ。命は水です」

微笑んで王子に答える王女だった。

「そういうことだったのです」

「そうだったのですか」

「それで王子」

静かに立ち上がりそのうえで王子に告げてきた。

「私はですね」

「貴女は？」

「貴方のことを知っています」

こう告げてきたのである。

「貴方がどうしてあの城に来たのかを」

「それでは」

「貴方が恋をされた三つのオレンジ」

彼女が封じられていたそのオレンジ達に他ならない。

「それは私のことだったのです」

「では私がファタ・モルガーナにかけられた呪いとは」

「そうです。私を愛するようになる呪いだったのです」
「それだというのである。」

「ですが。それで宜しいでしょうか」

「はい」

異存なくこくりと頷いてみせる王子だった。

「呪いであっても私の想いは同じですから」

「それは私もです」

彼女もだというのである。

「こうして救い出して下さり命を救ってくれた貴方に」

「では姫よ」

ニネッタを見詰めての言葉だった。

「これからは」

「まずはお城へ戻りましょう」

王子が本来いるその城である。

「そしてそこで」

「そうですね。式を挙げて」

「はい。そうして私達は」

「永遠に結ばれます」

こう言葉を交えさせていくのだった。

「ですから」

「まずは城に」

何につけても最初はそれであった。

「戻りましょう」

「そうですね。それじゃあ」

道化師もここで言うのであった。

「もう何の心配もいりませんし城に」

こうして三人で帰路に着く。王子の帰還が間もないと知ったクラ
リーチェは。レアンドル、それにファタ・モルガーナをあの大広間

に呼んでそのうえで話をするのだった。

「このままだと大変なことになるわよ」

「全くですな」

レアンドルは深刻な顔でクラリーチエの言葉に頷いていた。

第二幕その七

「オレンジを手に入れただけでなく姫まで手に入れられたのですから」

「このままでは王子は安泰よ」

クラリーチェの言葉も顔も今にも暴れそうな感じであった。

「どうすればいいのよ」

「案ずることはないわ」

三人の中でファタ・モルガーナだけは冷静だった。落ち着き払った顔で二人に対して言うのだった。

「まさかオレンジを手に入れるとは思わなかったけれど」

「途中で死ぬって思ったのね」

「そうよ。私のショーツを見ていいのは彼氏だけよ」

ここで庭での祭りのことを思い出し身体をわなわなと震わせはする。

「あの人だけよ」

「あの人って誰よ」

「チェリーよ」

「彼だというのである。」

「悔しいけれどね。この世がはじまった時から一緒に」

「あんた達付き合っていたの」

「夫婦じゃないけれどね」

「こう言いはする。」

「それでも。まあ付き合いが長くて」

「随分と仲が悪いみたいね、その割には」

「このことを突っ込むクラリーチェだった。」

「あんた達の仲の悪さは有名よ」

「わかってるわ。それでもよ」

ファタ・モルガーナの言葉が言い訳めいてきていた。

「とにかく。私の純潔はあいつにだけだから」

「純潔つて柄にもない」

「これでも女の子よ」

そこは譲らない彼女だった。

「彼氏以外に見られるなんてね」

「つてことはもう寝たりしたのね」

「まあそれは」

このことを言われると頬を真っ赤にさせるファタ・モルガーナだった。

「だから。この世がはじまった時から一緒だから」

「それでなのね」

「入りで寝るのは寂しいじゃない」

言い訳以外の何者でもなかった。

「だから。まあつまりはね」

「あんたつて思った以上にずっと純情なのね」

「仕方ないじゃない。とにかくよ」

顔を真っ赤にさせたうえで言葉を続けるのだった。

「王子のことは任せて」

「任せていいのね」

「王子はまずお城まで行かせて」

そこまでは行かせるのだという。

「そこから仕掛けるから」

「そう。幸せの手前でね」

「そういうことよ。じゃあわかったわね」

「ええ、私はそれでいいわ」

クラリーチエには異論はなかった。

「それでね」

「あんたはどうなの？」

「私もです」

レАндルにはある筈もなかった。

「それで」

「よし、じゃあ話は決まりね」

二人の言葉を受けて確かな顔で頷くそうしてそのうえで黒人の女を二人の前に出してきた。彼女はやたらとはっきりとした目を持っていた。

「黒人？」

「そうですね」

「スメラルディーナっていうのよ」

彼女のことを二人に紹介するのだった。

「私の召使でね」

「それがこの黒人女なのね」

「中々可愛いですな」

褐色の肌に黒い髪、それにそのはっきりとした目に厚い唇である。確かに中々可愛い感じである。

「この娘を使つてどうするの？」

「それで一体何を」

「まあ見ていなさい」

自分の召使の肩を抱きながら微笑むファタ・モルガーナだった。

「この娘が上手くやってくれるから」

「そう。それじゃあ」

「期待していますね」

こうして再び手を打つ三人だった。騒動はまだ続くのであった。

第三幕その一

第三幕 大団円

王子達はようやく自分達の城に辿り着いた。その頃はもう夜だった。

「ここがなのですね」

「うん、そうだよ」

こうニネツタに答える王子だった。

「ここがね。僕のお城なんだ」

「そうなの。城壁も高かったしお城の中も」

「気に入ってもらえたかな」

「ええ」

にこりと微笑んで王子に答える。彼等は今城の庭にいる。

「とても」

「それでは殿下」

道化師が二人の前に出て来て恭しく告げてきた。

「私はまず先に」

「父上に伝えてくれるんだね」

「はい、殿下と姫様のことを」

伝えるというのである。

「行って参りますので」

「頼むよ。それじゃあね」

「はい、それでは」

こうして彼は先に行った。そして後には王子とニネツタが残ったが二人もすぐに大広間に向かうのだった。

「じゃあ行こう」

「お城の中になのね」

「そうさ」

彼もまたにこりと笑って言うのだった。

「中にね。そうしてね」

「それで私達は永遠に」

「結ばれるんだ」

こう二人で言葉を交わす。

「それでいいよね」

「ええ、勿論よ」

もうその心はつながっている二人だった。

「だからここまで来たから」

「そうだね。だからこそだね」

恋はそのまま健在だった。そうして大広間に行こうとする。しかしそこにこつそりとスメラルディーナが出て来て王女の頭に懐から出したピンを刺す。すると。

王女の姿は消えてそこには一匹の大鼠がいた。鼠はすぐに何処かに消えた。

王子が大広間に辿り着き道化師と共に王に挨拶をする。そこには家臣達もいれば貴族達も居並んでいる。当然クラリーチェやレアンドルもいる。

「上手くいったわね」

「はい」

その中でクラリーチェとレアンドルは二人の後ろに控えるスメラルディーナを見て笑っている。服は王女のもだったがしるのは彼女なのである。

「あの、父上」

「何ともうしましょうか」

王子と道化師もまた彼女を見て啞然としながら玉座にいる王に対して言うのだった。

「この人ですが」

「違うのですが」

王に対して話す。

「ニネットタ王女ではありません」

「この人は黒人ですが」

「黒人の国もあるぞ」

だが王はその二人に対してこう言うのだった。

「ならば黒人の王女がいても当然だ」

「いえ、そうではなくてです」

「この王女は別人です」

こう王に話すのである。

「私が連れて来たのは黒人ではありません」

「何故この人が？誰なのでしょうか」

「そうだ。一体誰なんだ？」

王子も戸惑いながら道化師に対して問う。

「君は知っているか？」

「いえ、こうした人は知りません」

道化師も知らないことだった。

「一体誰なのか」

「わからない。本当に誰なんだ」

「私とその三つのオレンジの中に封じられていた姫です」

しかしスメラルディーナはこう王に対して申し上げるのだった。

「そして王子は」

「僕は？」

「私と結婚すると約束されたのです」

さらに王に対して申し上げた。

「間違いなく」

「それは事実だ」

このことは王子も認めめた。

第三幕その二

「しかしだ」

「そうですよ」

道化師も言う。

「僕が約束したのは二ネッタ王女で」

「貴女ではありませんが」

「いえ、二ネッタ王女は私です」

しかしスメラルディーナはあくまでこう主張するのだった。

「それは間違いありません」

「間違いだよ」

「どうしてこの人が？」

「どうということなんだ？」

「さて」

家臣達も貴族達もこの流れには訳がわからない。

「どうということなんだろう」

「黒人の国があるのは知っているが」

それはよく知られていることだった。彼等もそうした国と交流が

あるからだ。

「それでも。王子は嘘を言っていないようだし」

「道化師もだ」

「トウルファルディーノよ」

ここでパンタローネが道化師に対して尋ねてきた。

「その言葉に偽りはないな」

「私は冗談や戯れは言いますが嘘は言いません」

化粧の下に真面目そのものの顔を浮かべての言葉だった。

「それは大臣もよく御存知だと思いますが」

「その通りだ。では」

「君からも何とか言ってくれ」

王子はそのパンタローネに対して話した。

「何でこんなことになったんだ」

「そうだな。全く以って奇妙な」

家臣達と貴族達の話も続く。

「誰なんだ？あの黒人は」

「王子が連れて来られたという本当の王女は何処に？」

「それだな。だとしたら何処なんだ？」

「どうなっているやら」

彼等も首を傾げるばかりであった。しかしここで王が言った。

「王子よ」

「はい」

「約束したのだな」

このことを我が子に対して問うのだった。

「その通りだな」

「はい、それは間違いありません」

胸を張って父王に対して述べる。

「私は王女と結婚の約束をしました」

「ならばだ」

そのことを確認した王はあらためて息子に対して告げた。

「王女と結婚するがいい」

「王女とですか」

「その女が自分を王女と言うならばだ」

スメラルディーナを見ての言葉である。

「その女と結婚するのだ」

「ですが父上」

「王になる者は嘘をついてはならない」

だが王の言葉は厳しいものだった。

「だからだ。いいな」

「それはその通りです」

「ならばだ。話はこれで終わりとする」

王はその絶対そのものの言葉で告げた。

「よいな」

「わかりました。それでは」

「婚礼の準備を整えよ」

王はさらに一同に告げた。

「よいな」

「はっ、では」

「すぐに」

「何がどうなっているのだ？」

「私にもわかりません」

すぐに婚礼の場が整えられようとしていた。その中でパンタローネと道化師は困惑しきった顔で言い合う。王子も何がどうなったのか把握しきれず呆然となっている。

「二ネツタ王女は一体何処に」

「わかりません。それは」

「そしてこの黒人の女は」

王子も道化師も訳がわからないという顔になっている。しかしそれをクラリーチェとレアンドルは見ながら。二人でほくそ笑んでいるのだった。

第三幕その三

「上手くいったわね」

「確かに」

王子への嫌がらせが成功してである。今はほくそ笑む二人であった。

チエリーは地下でファタ＝モルガーナと対峙している。怒りに満ちた目で彼女を睨んでだ。

「おい」

「何かしら」

その彼の言葉を平然と受けてみせる魔女だった。

「何が言いたいの？」

「よくもやってくれたな」

今にも殴りかからんばかりの様子での言葉だった。

「幾ら何でもあれはないだろう」

「魔法の初歩の初歩じゃない」

ファタ＝モルガーナはこう彼に返した。

「そうでしょ？変身させるなんていうのは」

「私が言っているのはそういうことではない」

魔女のその言葉を否定する。

「あそこで御前の召使いを出すのか」

「そうよ。考えたけれど有効な一手だったわね」

「幾ら何でもあれはないだろう」

こう言ってまた抗議する彼だった。

「あそこであれは」

「要は勝てばいいのよ」

ファタ＝モルガーナも両手を腰にやって顔をずい、と前に出してチエリーに言い返してきた。

「あんただってよくやってきたことじゃない」

「よくだと!？」
「そうよ。今までだって」
そのこの世のはじまりからのことを言い出す彼女だった。
「やってきたでしょ。違う?」
「だからいいというのか」
「そうよ。抗議するというのがならよ」
さらに彼に対して言うのだった。
「私の鼻をあかしてみせることね」
「言ったなっ」
「言ったわよ」
売り言葉に買い言葉であった。
「それも何度も言ってやるわよ」
「よし、それならばだ」
魔女に言われて彼も本気になった。
「見ているのだ」
「何をするのかしら、それで」
「やられたらやり返す」
「まずはこう言うチエリーだった。」
「それを見ていることだな」
「ふん、じゃあ見せてもらっわ」
ファタ¨モルガーナも彼のその言葉を受ける。
「楽しみにしているわ」
「一つ言っておく」
彼は魔女に対して大見得を切ってきた。
「最後に勝つのは私だ」
「何を根拠に言っているのかしら、その言葉は」
「私の実力からだ」
それが根拠だというのである。
「わかったな。何があってもだ」
「わからないわね。まあ精々頑張ることだな」

「ふん、そうさせてもらおうわ」

ここまで言っていてそれぞれ顔を背け合う二人だった。その有様は誰がどう見ても痴話喧嘩そのものだった。二人が何と言おうともである。

王子と王子の婚礼の場は庭でとなった。王はもう玉座にいる。そして家臣達も貴族達も居並んでいる。彼等はここでもあれこれとひそひそ話をしていた。

「王子の御婚礼自体はな」

「いいことだ」

「全くだ」

まずそれはいいことだった。しかしであった。

「だがなあ」

「どういうことなんだ？一体」

「全くだ」

まだ首を傾げているのだった。

第三幕その四

「この事態はな」

「全く以つて訳がわからない」

「その通りだ」

やはり彼等もスメラルディーナは怪しいと思っていたのである。

「あの黒人女。どう見てもな」

「王子の仰る王女ではないが」

「王は何故あの女と婚礼を認められたのだ？」

「さっぱりわからん」

だが式は今はじまろうとしていた。詩人達が音楽を鳴らし悲劇役者も喜劇役者も呆けた者もピエロも居並んでいる。彼等がこの国の国家を歌っている。

「王は全てを愛し全てを見ておられる」

「王に栄光あれ、この国に繁栄あれ」

こう歌われている。王子の座と王女の座には幕がかけられている。それもまた謎であつた。

「何故座に幕が？」

「わからない。一体」

「これはどういうことだ？」

家臣達も貴族達もここでまた首を傾げさせる。その間に王子が来た。横にスメラルディーナを連れて後ろにパンタローネと道化師を従えている。そうしてやつて来たのであつた。

彼等は王の前で跪く。王はその彼等に対して言ってきたのであつた。

「それではだ」

「はい」

「王子よ」

まずは彼に対して告げるのだった。

「王女と結婚するな」

「はい」

そのことには静かに応える王子だった。

「その通りです」

「わかった。それではだ」

王は彼の言葉を確認したうえで、「こうピエロ達に告げるのだった。

幕をどけるのだ」

「幕をですか」

「そうだ。王子の座と王女の座の幕をだ」

それをだというのである。

「どけるのだ。いいな」

「わかりました。それでは」

「今すぐに」

こうして幕があげられる。すると王女の幕に座っていたのは。

「おや!？」

「あれは」

「鼠!？」

誰が王女の座にいる鼠に驚きの目を向けた。それは確かに鼠だった。

「やけに大きいな」

「しかも何かかなり綺麗だぞ」

「あの鼠は一体」

「よし、そこにいたか」

ここで誰かの声があった。

「やっと見つけたぞ、やれやれだ」

「えっ、貴方は」

「どつしてここに」

王子の前にいきなりチェリーが現われた。王子と道化師は彼の姿を認めて思わず立ち上がってその彼に対して声をかけたのであった。

「何故また」

「私達の前に」

「そなたを助ける為だ」

王子に顔を向けての言葉だった。

「その為にだ」

「私をですか」

「そうだ。王女はいる」

彼は告げた。

「ここにな」

「ここには？」

「ですがここにいるのは」

「鼠ですが」

二人だけでなくパンタローネも立ち上がって彼に問う。

「それで何処に」

「鼠しかいないというのに」

「それでもいると仰るのですか」

「その通りだ。見るがいい」

言いながら左手に持っているステッキを鼠に向ける。そうしてこ

う叫ぶのだった。

「戻れ！」

この一言だった。すると鼠からぼわんと煙があがった。そこから

出て来たのは他ならぬニネッタ王女だった。

「王女！？」

「では鼠が王女だったのか」

「やはりその女は王女ではなかったな」

王がここで言った。

第三幕その五

「そう思っていたがな」

「父上、それでは」

「わかつておられていたのですか」

「その女が王女ではないのはな」

わかつていたというのである。こう二人に述べる。

「そなた達は嘘をつかん。それでは答えは一つしかない」

「左様でしたか」

「それで」

「しかしだ」

王はさらに言うのだった。

「本物の王女がいるのはわかった」

「はい」

王子はもう王女の手を取って二人寄り添っている。しかし話はこれで終わりではなかったのである。

「だがその黒人の女は何者だ？」

「さて、それは」

「それがさっぱり」

王子も道化師もこう言って首を傾げるばかりであった。

「私にもわかりません」

「会ったこともない人です」

「それも当然のことだ」

ここでチェリーがまた言った。

「会ったことがないのはな」

「当然なのですか、それは」

「といたしますと」

「この女はだ」

チェリーはスメラルディーナを見据えている。黒人女は腹を括っ

た様に無言で彼を睨み返している。

「スメラルディーナというのだ」

「スメラルディーナ？」

「それは一体」

「魔女ファタ」モルガーナの召使いなのだ」

それだというのである。

「我が仇敵のな」

「それでは」

ここまで話を聞いた道化師は察したのだった。

「ファタ」モルガーナが以前庭にいたのは」

「そうだ。悪巧みをしてのことだ」

「やはり」

「元々王子に鬱の呪いをかけたのもあの女だ」

「そうだったのですか」

「そして」

チェリーの告発は続く。

「これには関わっている者達がいる」

「まずいわね」

「これは」

今の彼の言葉を聞いて顔を顰めさせたのはクラリーチェとレアン
ドルだった。

「というよりはその者達が魔女に頼んだことだった」

「それではだ」

王は魔法使いの話聞きながら述べてきた。

「一連のことはだ」

「左様、仕組んだ者達がいるのだ」

こう王に対しても語るチェリーだった。

「王の姪のクラリーチェと大臣のレАндルだ」

「何とっ」

「そうだったのかっ」

家臣達と貴族達が一斉に彼等の方を向いて声をあげる。

「怪しいとは思っていたが」

「二人で共謀してか」

「まずいわよ、これは」

「いえ、まずいなんてものじゃありませんよ」

二人は怒りに満ちた顔の一同に囲まれて進退窮まっていた。

「どうしようかしら」

「逃げられませんし」

「その二人と黒人の女を捉えよ」

すぐにこう言う王だった。

「よいな」

「はい、わかりました」

「それでは」

悲劇役者達と悲劇役者達が二人に向かい呆けた者達とピエロ達が黒人女に向かう。こうして三人は捉えられ王の前に引き出されたのであった。

第三幕その六

「それでは王よ」

「うむ」

「どうされますか？」

パンタローネが彼に対して問うた。

「ここは」

「縛り首だ」

そうするといつのである。

「三人共だ。いいな」

「わかりました。それでは」

「縛り首なんて」

「何という屈辱」

それを告げられたクラリーチェもレアンドルもまずは苦い言葉を出した。

「よし、ではすぐに処刑をせよ」

「あつ、それはお待ち下さい」

「ここはどうか」

しかしここでパンタローネと道化師がこう言ってきたのであった。

「今は婚礼の場ですし」

「それに悪巧みは阻止されましたし」

「許せというのか」

「はい。どうか御慈悲を」

「私からも御願いします」

「ふうむ」

王はそれを聞いても即断しなかった。王子に顔を向けて問うのだつた。

「そなたはどう思うか」

「私ですか」

「そうだ。どうすればいいか」

あえて被害者でもある彼に対して問うたのである。

「この件は」

「確かに彼等は罪を犯しました」

王子もそれはわかっていた。

「しかしです。私は殺されてはいません」

「それは確かだな」

「では死刑にするまでもないでしょう」

これが彼の考えであった。

「そうですね。追放で宜しいかと」

「よし、わかった」

王は彼の言葉を受けてそのうえで頷くのだった。

「それではだ」

「はい。判決は」

「如何に」

「追放とする」

パンタローネと道化師に応える形で述べるのだった。

「この三人は追放とする。それでよいな」

「はい、それではそれで」

「そうしましょう」

二人はその判決を聞いて満足した面持ちで応えた。それは家臣達も貴族達も同じであった。

「そうだな。これでいいな」

「ああ。確かに罪を犯したとはいえ」

「殺すことはない」

判決は妥当だと。誰もが考えているのだった。

「さて、それではだ」

「祝いだが」

「まさかここでそうしてくるなんて」

しかしであった。ここでまた一人出て来たのである。今度は銀髪

の魔女であった。

「チエリー、よくも」

「私の勝ちだ」

チエリーはそのファタ・モルガーナを見据えて言葉を返した。

「そうだな。それを認めるな」

「ええ、仕方ないわ」

忌々しいがその通りだった。それは彼女も認めるしかなかった。

「私の負けよ」

「見たか。ではすぐに立ち去るがいい」

「そうしてやるわ。けれど」

負けは認めた。しかしそれでも彼女は毅然としてこう彼に返すのだった。

「今度はそうはいかないわよ」

「今度はか」

「今夜も」

夜の話もするのだった。

「覚えていることね」

「忘れるものか、今夜もだ」

チエリーも受けて立つのだった。

第三幕その七

「私の勝ちだからな」

「ベッドでは私の方が上よ」

「これまた実に赤裸々な言葉である。」

「それをわからせてやるわ」

「勝手にしろ。それでだ」

「ここまで話したうえでファタ・モルガーナに問うのだった。」

「これからどうするつもりだ」

「どうするですって？」

「御前は今は敗れた」

問うのはこのことと密接に関係のあることであった。

「早く逃げないと大変なことになると忠告している」

「ええ、確かにね」

「周りは敵だらけである。何しろ悪事が公になって追放が決定したクラリーチエ達の仲間だったからだ。それがわからない筈もなかった。」

「それはね」

「では早く逃げ去るのだな」

「先に地下で待っているわ」

「こつ言つとだった。あらためてクラリーチエ達三人を見て告げた。」

「あんた達もよ」

「私達も？」

「一緒にですか」

「スメラルディーナは当然だし」

「自分の召使だからであった。」

「あんた達とは縁ができたしね。追放がとけるまでの間匿ってあげるわ」

「反省したら戻してやる」

王もここでクラリーチエとレアンドルに告げた。

「それまで頭を冷やすのじゃな」

「そういうことよ。それじゃあ」

王の言葉も受けあらためて三人に言うファタ「モルガーナだった。

「私の世界にね」

「何かおっかないけれど」

「そうも言つてはられないか」

スメラルディーナを除いた二人は幾分か以上に不満そうではあつた。

「地下つていえば小鬼もいるし」

「魔物も大勢いるし」

「そこで頭を冷やせ」

「ゆっくりとな」

二人の周りで喜劇役者とピエロ達が飛び跳ねて踊りながら告げる。

「そして改心するのだ」

「そうすれば御前達は救われる」

悲劇役者と詩人達は遠くから告げる。

「さもなければ馬鹿になるのだ」

「馬鹿になるのも確かにいいな」

道化師は呆けた者達の今の言葉に頷いた。

「少なくとも悪巧みはしない」

「確かにな」

パンタローネも彼の今の言葉に頷く。

「それもまたいいな」

「はい、その通りですよ」

「では行くわよ」

早速三人を後ろにして魔法を仕掛けにかかる魔女だった。その間もチエリーを見据えてそのうえで言うのであった。

「今夜覚えておくことね」

「わかつたから早く行け」

「それじゃあ」

ここまで言って激しい爆発と共に姿を消すファタ・モルガーナと三人だった。こうして騒がしい者達はこの世から姿を消したのであった。

そうして残った一同は。王の音頭で言うのだった。

「では皆の者」

「はい」

「それでは」

「乾杯だ。そして祝おう」

その手に葡萄酒を満たした杯を手にしての言葉である。

「王子と王女の幸せをな」

「はい！」

「永遠の幸せを！」

二人を中心に今婚礼を祝うのだった。騒動は終わり幸せが訪れた。

三つのオレンジの恋 完

2009・10・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442n/>

三つのオレンジの恋

2011年4月28日00時58分発行